



Dr. 健康コラム

たいじょうほうしん

带状疱疹の治療と予防について

城里町国保七会診療所 上井 雅哉

○带状疱疹の原因・臨床像について

带状疱疹の原因は、多くの人が子どもの頃に感染する水痘(水ぼうそう)と同じ「水痘・带状疱疹ウイルス」です。このウイルスは非常に感染力が強く、空気感染や接触感染により他の人へと感染していきます。水痘・带状疱疹ウイルスに初めて感染すると、約2週間の潜伏期を経て、発熱と全身に水疱を発症し、回復まで7～10日ほどかかります。

しかし、水痘が治った後も、ウイルスは脊髄神経節に潜っており、加齢や疲労、ストレスなどによって免疫力が低下するとウイルスが再び活性化し、带状疱疹として発症します。頭頸部領域に発症した場合、眼科合併症や顔面神経麻痺を引き起こすこともあり、皮膚症状がよくなった後でも带状疱疹後神経痛が長期に続く場合があります。

1. 初めて感染した時は、水痘(水ぼうそう)として発症します。
2. 治った後もウイルスは長い間体内に潜っており、普段は免疫力によって活動が抑えられています。
3. 疲労やストレスなどで免疫力が低下するとウイルスが再び活性化します。
4. 带状疱疹を発症します。体の左右どちらかの神経に沿って帯状に配列した水疱と、神経痛のような痛みがみられます。



○最近の带状疱疹の動向

平成26年10月から水痘ワクチンが定期接種化となり、水痘を発症する子どもが減少しました。その結果、ブースター効果(体内で一度作られた免疫機能が再度抗原に接触することによって、さらに免疫機能が高まること)を得る機会が減り、近年、子育て世代の20～40代の人の発症率が高くなっています。さらに、令和2年以降、带状疱疹の患者が増えている印象があります。感染予防対策の徹底により、ウイルスに触れる機会が減少したことに加え、新型コロナウイルスの感染にともなう細胞障害性T細胞の減少による免疫力の低下が原因のひとつと考えられます。

○带状疱疹の治療

抗ウイルス薬

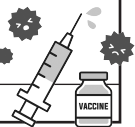


带状疱疹の治療には、ウイルスのDNAの合成を妨げる抗ウイルス薬が使われます。診断後、早期に治療を開始することで皮膚の発疹の拡大が抑えられ、带状疱疹後神経痛への移行リスクも軽減されます。服薬回数は、体内吸収後に活性型に変化するプロドラッグの出現により、1日3回で十分な効果が期待できるようになり、最近では1日1回の製剤も使用可能となりました。また、時期や痛みの強さに応じて鎮痛薬、鎮痛補助薬を組み合わせる治療を行います。

○带状疱疹の予防

50歳以上を適応とするワクチンには、弱毒生水痘ワクチンと不活化ワクチンの2種類があります。

	弱毒生水痘ワクチン	不活化ワクチン
用法・用量	0.5mL 皮下注射	0.5mL 上腕三角筋内注射
接種回数	1回	2か月間隔で2回
有効性	60歳以上健康成人の臨床研究 带状疱疹発症率：51.3%減少	50歳以上健康成人の第III相試験 带状疱疹予防効果：97.2%
適応・禁忌	・水痘予防に適応あり ・妊婦、免疫機能に異常を有する者、 免疫抑制治療中の者は接種禁忌	・水痘予防に適応なし ・過去に水痘にかかったこと のない人は受けられない
副反応	接種部の局所反応	筋肉痛、頭痛、疲労など



上記のとおり接種方法、回数、対象者などに差があります。また、不活化ワクチンの予防効果は弱毒生水痘ワクチンよりも高いため、推奨されていますが、価格が高いなどの問題点もあります。ワクチンの選択については、かかりつけ医と十分相談して決めることが大切です。